温かな生活の場を支える技術と自負

⑨⑨ 飯能老年病センター（埼玉県飯能市）

2階と6階が精神病棟、3～5、7～8階はそれぞれ認知症病棟。
屋上にはヘリポートと自家発電機も

「こういう病院があって良かった」

患者の家族からはそんな声が続々寄せられている。開院から20年。飯能老年病センターはほぼ満床の状態を今日まで維持してきている。

精神科と内科の連携によって認知症と内科合併症の両方を治療する。これが同センター最大の特徴だ。それぞれに担当医が付く病院は全国でも珍しい。質の高い医療と手厚いケアを提供する。

「2階から8階までの病棟は回廊式。プライバシーを保ち、人権を守りながら、患者さまのケアができるよう心掛けています」（木川好章院長）

患者の多くは長期間入院することになる。認知症の症状治療で最も大事なのは患者の心。どれだけ的確な医療を施しても、心を閉ざしてしまっては何にもならない。患者にとって「生活の場」でもある部屋は重要な役割を果たしている。

「病棟の造りは廊下を広く取っています。ご家族が車いすを押せる庭園もある。認知症の患者さまの中には病院というより、施設かホテルと誤認される方もおられるようです」（村田雄一副院長）

明るく開放的な病棟と温かみのある部屋。患者が笑顔で過ごせるための工夫が随所にある。6～8階の2人部屋・4人部屋の病床横の家具にはコルクボードを設置。家族の写真や患者の作品を貼ることで無機質な空間が心安らぐものに変わる。窓からは柔らかな日差し。内装は温かい色調だ。

食事にも気を配っている。病状や体調、好みはそれぞれの患者で全く違う。そこで患者一人一人に合わせた食事のシステムを採用。医師の指導の下、栄養士と患者が直接話し合い、食事の内容を決めている。ご飯は普通・おかゆ・ペースト、おかずも普通・刻み・ペーストがある。量もそれぞれに変えることでオーダーメードとなる。

飯能老年病センターが考える「質の高い医療」「手厚いケア」とはどのようなものなのだろう。

「高齢の患者さまを受け入れることで、『医療の隙間』を埋めているといえます。スタッフも精神科と内科、両方の面からの対応が可能です。この点には自負を持っています」（木川氏）

「認知症に関する学会には一通り入っています。最新の情報を入れて一番いい形で治療に取り組みたいと考え、実行しています」（村田氏）

他院で断られる患者も極力引き受ける。高齢化が進む首都圏でも姿勢がぶれることはない。

デイルーム。患者が食事やレクリエーションを楽しむ場

入院患者の作品。リハビリの一環として
作業療法士と共に作り上げる

廊下の広さは病院の大きな特徴。車いすでもゆったりと移動できる

2011年5月に透析室を新設。
認知症で透析継続が困難になった患者も受け入れて対応

病院のすぐ隣にある庭園。
季節ごとの植物が花をつける中、家族と患者が散歩できる

毎年春には桜の生木をロビーに設置。
患者が花見を楽しむ。「染井吉野」「陽光桜」「河津桜」の3種